

Title	'60年代のアメリカ演劇の動向(1) : Arthur L. Kopitの場合
Author(s)	田川, 弘雄
Citation	大阪外国語大学学報. 22 p.147-p.157
Issue Date	1970-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80374
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

'60年代のアメリカ演劇の動向(1)

—Arthur L. Kopit の場合—

田 川 弘 雄

The Theatre of the Absurd is thought to be the main current of the American drama of the '60s. At the close of the decade, an attempt to survey the important works of the last ten years is not entirely meaningless. As the first step, I chose a play by Arthur L. Kopit, *Oh Dad, Poor Dad, Mamma's Hung you in the Closet and I'm Feeling So Sad*. This play is considered to be a curtain-riser of the decade not only because it was opened coincidentally on January 7, 1960, but because the play reflects significantly the vital problems of the '60s. Comparing this play with *Suddenly Last Summer* by Tennessee Williams, in the following discussion, I shall try to evaluate *Oh Dad, Poor Dad* mainly in terms of plot-character workings, especially of the relation of the son and the mother. I also hope to prove Kopit as a worthy forerunner of the decade of the Theatre of the Absurd.

1960年1月7日に Arthur L. Kopit の劇, *Oh Dad, Poor Dad, Mamma's Hung you in the Closet and I'm Feelin' So Sad* がボストン郊外 Cambridge の Agassiz Theatre で開幕した時に、観客の受けとりかたは全く種々万別であった。観客は一樣に感動し眩惑され熱烈な拍手でもって迎えたのであるが、その劇の意味するところの解釈をめぐるには全く意見がわかれたのであった。作者自身が副題につけているように、A Pseudoclassical Tragifarce in a Basterd French Tradition であるとして猟奇趣味に満ちた怪奇喜劇と受けとった人もあったし、女主人公 Madame Rosepettle の人生観があまりにグロテスクであると悲しむ者や Christian Science Monitor 紙のように、“Kopit is convinced she is right.” と作者自身の人生観にまで言及する者もあった。¹⁾ 年が経ちハーバードの学生に過ぎなかった Kopit の評価も一応定まった現在において、一つの側面からこの劇をインタープリテーションしてみるのもあながち無駄ではないだろう。

学報の前号所載の拙稿において言及したアメリカ演劇における親子の関係という点からこの劇をふり返ってみようと思うのである。私は Frank D. Gilroy の *The Subject Was Roses* や Eugene O'Neill の *Long Day's Journey Into Night*, Edward Albee の *Who's Afraid of Virginia Woolf?* などを分析考察し、現代では夫婦の関係は antagonistic cooperation であり、反目しながら生活していくのが現代の夫婦の姿であり、その夫婦の間のくさびを子供に求めようというのはもはや幻想に過ぎないのであって、親と子を含めた家族というものは存在し得ないのである。

このような親子関係の現実と直面して人々が苦悩する姿を描く劇に「想像上の子供」が登場するのである。実在の子供にたくせない夢を「空想の子供」に委ねるしかしかたがない人々の悩みが表わされており、ここにアメリカ近代社会の苦悩の一表現があるといった主旨の論述をしたのであった。特に Edward Albee の *Who's Afraid of Virginia Woolf?* の大学助教授夫妻の場合、お互いに傷つけ痛め合うことによってのみ存在できるカップルであり、特に妻が夫を傷つけ夫はそれに耐えることによって生き甲斐（もしあれば）を見出しているように見え、上演された当時はその赤裸々な会話とともに、そのあまりにも不毛な夫婦関係の提示がセンセーショナルな論議をまきおこしたのであった。それが作者の特異な生活経験がもたらしたものであるとも、「想像上の子供」はブロードウェイを瞠目させるための *theatrical device* であるともいわれたりしているが、私は多くのアメリカ人が意識的にあるいは無意識的に同じ苦悩を感じていたからこそ、Albee の代表作として彼をブロードウェイに押出す役割を果し得たのだと思う。「想像上の子供」は Lee Baxandall が “The fantasy-baby gives Martha some one all her own, to use any way she wants, just as countless women have used their actual children.”²⁾ と説明しているように、子供を全く自分のものとして全く自由に扱いたい女性の母性本能が、それを不可能にする親子関係の現実との間にフラストレーションをおこした代償として生まれて来た必然のものであった。女性のこのフラストレーションの解決法としての「想像上の子供」は実に巧みなデバイスであったが、Kopit は同じテーマをバレエもどきの怪奇なファンタジーに託して描こうとしたのであった。妻として、母親として男性を己の思うままに扱わずにおかない女性の本能が現在アメリカの家族関係の中で、男性にどれほど脅威であるかを、Edward Albee の *Who's Afraid* の上演の二年前すでに不条理劇に似た形で追究しているのである。Oh Dad, Poor Dad, Mama's Hung You in the Closet, and I'm feeling So Sad は著名なバレエの振付師 Jerome Robbins が演出し、モダンバレエに似た動きに構成したことや Josephine Van Fleet が女主人公の役を見事にこなしたことなどにも大いにおかげをこうむってはいるが、オフ・ブロードウェイ演劇のメッカ The Phoenix Theatre の歴史のうちでも最も際立った成功を収め、当時財政的危機に直面していた同劇場を一時的にせよ救ったのは新進作家 Kopit のこの劇の非凡さによることは否定出来ない。非凡といえない迄も特異な劇であることは確かである。一言でいうならばこの劇はグロテスクなシニユーレアリスティックな形式をもち、性、母親、男を喰いつくす女性に対する反抗をテーマとした劇である。登場人物も誇張され象徴的であり、Tennessee Williams の初期の少々気取ったパロディに出てくる人々のようにこっけいである。舞台装置も奇抜で次第次第に大きく成長していく植物、はえじぐい、セリフをしゃべる魚ピラニヤ、自分勝手に開閉するドア。勝手に動いたり固定したりする椅子。押入れから出て来て人に抱きつく死体など舞台装置家が腕を振るうのに好個の場所を提供しているのである。

この劇も時流にのる不条理演劇の亜流だとし Robert Brustein のように “Kopit has a tendency to ape the techniques of avant-garde without adding anything original of his own.”³⁾ と酷

評するものもあるが The Theatre of the Absurd の著者 Martin Esslin は “There is enough evidence of his genuine concern with the problem of the play to prevent it from being a mere parodistic joke.”⁴⁾ といってこの劇の真剣さを認めているのである。

主役である Madame Rosepettle は夫を全く自分のものにしなければ気がすまない強烈な女性である。自分の意のままになる醜い男を夫にし、自分の目的を遂げるために彼を殺し、自分の勝利のシンボルとして夫の死体を棺にいれて旅先にまでもち歩くのである。この Madame Rosepettle が、ハバナのホテルの豪華な一室に到着したところで幕が開く。ボーイが運び込んでくる荷物は、棺とか、はえじごく、猫を喰べるピラニア、など奇妙なものばかりであった。喪服姿の Madame Rosepettle が連れている息子 Jonathan は母親の前ではひどい吃音であり、十七才にもなるのに十才の少年のような服装をしていた。Jonathan は切手を集め、貨幣を収集し、沢山の本をもっているが自由に外出したり人に会ったりすることは許されてない。Madame Rosepettle は海岸の砂浜で愛し合う恋人達に砂をかけてまわるという欲求不満的な行動をしたり、素晴らしいヨットをもつ Roseabove 提督を誘い、二人だけの晩餐でシャンパンをくみ交し、男の心をひきつけながら、世にも怪奇な夫との生活を話し提督を慄然とさせ、恐怖と幻滅のどん底に追い込んだりする。Madame Rosepettle の語る夫 Albert Robinson Rosepettle III は、他の求婚者達と違い貧しく醜い背の低い汗かきの男だった。他の求婚者がもっと若い女性のもとに去った時に、Albert がやって来て求婚した。

そこで二人は結婚した。何故結婚したかは彼女にもわからない。ただ彼女がいうのは “... perhaps it's because one look at Albert's round, sad face and I knew he could be mine. . . that no matter where he went, or whom he saw, or what he did, Albert would be mine—mine to love, mine to live with, mine to kill; my husband, my lover, my own. . . my very own.”⁵⁾

初夜は床を共にしたが、翌朝彼女は寝床をひきあげ別室にうつってしまった。Albert 自身に罪があったわけではなく、簡単に満足してしまう男の他愛なさにはいやげがさしたのだ。“Oh how easily is Man satisfied. How easily is his porous body saturayed with ‘fun.’ All he asks is a little sex and a little food, and there he is asleep with a smile and snoring.”⁶⁾ と彼女はいう。そして逆説的に “Oh, how considerate is Man when he's had his fill of sex. How noble, how magical, how marvelous is Love.”⁷⁾ といっているように愛自体に絶望したのかも知れない。Madame Rosepettle にとって夫は見知らぬ人同然に思えるのだった。結婚した以上はもっと彼を知らねばならないと思った。そして彼を観察しはじめた。夜、彼が寝室へ入ると鍵穴からのぞき、彼が眠りにつくと彼の寝床のそばにはって一晩中彼を観察し、夢の中の秘かな考えも読みとろうとした。そして朝彼が目覚める前に自分の部屋へ帰っていった。

一ヶ月も経ったころ、彼女はあの一夜のことで妊娠していたことに気づいた。夫には知らせないままに12ヶ月たって、歯が出そろっているほど成熟した子供が生れた。夫には知らせずに暗い

部屋の隅に子供の籠をおいた。夫に安心出来る迄は子供のことは知らせないことにしたのだ。
“until I found out exactly why he'd married me, until I understood his dreams, until that time I was not safe, and until that time I would not tell him that his son had been born.”⁸⁾

その頃 Albert は大金持になっていて、夫妻は四エーカーもある大邸宅に移り、彼は幾人もの秘書を傭っていた。その中の一人 Rosalinda は醜さにおいて Albert と共通しており、この二人には互いに求め合う何物かがあった。夫人は二人が罪な関係におちいるように仕向けた。Madame Rosepettle は二人がベッドを共にしている間は鍵穴からのぞき、寝についてからは二人のそばによって聞き耳をたてたのだ。今迄は殆んど話さなかった Albert が話した。雄弁に愛の言葉を語りだしたのだ。それもせむし女を讃えて夢のうちに喋るのだったが、そのうちに苦悩の様子が彼にあらわれ、憔悴の色が濃くなってきた。食欲もなく眠れぬ夜が続いた後に彼は死んだ。夜中の一時に。一諸にねていたせむし女は彼の死を朝迄知らなかった。六時間も死体と一緒にいたことを知らなかったのだ。なんとかわいそうな情人だろう。本当に彼らの間に愛があったのだろうか。Madame Rosepettle はその愛の存在を否定している。

“Well, don't you see? Their affair, their sinfulness—it never even existed! He tried to make me jealous but there was nothing to be jealous of. His love was sterile! He was a child. He was weak. He was impotent. He was mine! Mine all the time, even when he was in bed with another, even in death. . . he was mine.”

このようにして Madame Rosepettle は、夫の愛を確認し得たのであり、夫を本当に自分のものにすることができたのだ。

夫をないがしろにし、息子に対して異常な占有慾をもついわゆる dominant wife は文学作品のヒロインとしてはギリシャの時代迄さかのぼることができる。Troy 戦争のギリシャ軍の総大将 Agamemnon を殺したその妻 Clytemnestra は Aeschylus の作品などで有名であり、Eugene O'Neill もその話を下敷にして Mourning Becomes Electra を書いている。その劇で O'Neill はヒロイン Christine の夫殺しの主たる動機として、夫の清教徒的道德意識に対する彼女自身の内にある異教的享楽主義との対立相克をあげ、ギリシャ劇の息子 Orestes に対応する Orin に対する母親 Christine の気持をフロイド流の Oedipus Complex から解明し、その理論を劇化している。近代演劇の祖 Strindberg の作品にも stronger sex としての女性像が多く描かれているし、D. H. Lawrence にもそのような女性観が見られる。彼の影響を強く受けている Tennessee Williams の作品にも当然のこととして、dominant woman が多く現れている。特に、Lawrence の女性観を Williams がインタープリテーションしている作品に I Rise in Flame, Cried the Phoenix という一幕物がある。これは D. H. Lawrence の生涯の最後の日を想像して描いたものであるが、Williams によれば Lawrence は女性を性行為における「侵略者」として描き、「輝かしく照りかがやいている男性の太陽が、それを喰いつくそうとする暗闇という「みだらな女、におかされる」という cannibal image をもった比喩をくり返し使っている。この Williams

の発想の影響を Kopit が受けていることは否定できない。cannibal image として Williams が Suddenly Last Summer で使った『はえじごく』を Kopit も使っているし、The Glass Menagerie の原型となった Portrait of a Girl in Glass で小猫 alley-cat が唐犬に喰い殺されるシーンがあるが、Oh, Dad でピラニアが小猫を餌としているのも cannibal image の連想を同じうするものである。Williams の作品には dominant woman が実に多く登場することは Cat on a Hot Tin Roof の Maggie など一々列挙する必要もないことであり、この点からも Kopit が Williams の影響を受けていると感じられるのであるが、更に Kopit の劇の第二テーマである母親の息子に対する独占欲あるいは過剰保護という点に関しても Williams の劇に多くの例が見られる。例えば Auto-da-Fe の Mme. Duvenet、The Glass Menagerie の Amada も、その範疇に属するだろうし、Suddenly Last Summer の Mrs. Venable などはその代表的な例である。先に cannibal image としての『はえじごく』をあげたが、この劇では孵化したばかりの無数の海亀の子をおそう鳥の大群に象徴される cannibalism の強烈さ、そして Mrs. Venable とその息子 Sebastian との関係、又 Mrs. Venable が Sebastian から遠ざけようとする女性 Catharine という相似的人物構成からも Suddenly Last Summer は Kopit が Oh, Dad を書くのに一番影響を受けた作品であると思える。

このように述べてくると、Oh, Dad のテーマは古くから多くの文学作品にあらわれたものであり、アメリカ演劇においては Tennessee Williams によって描きつくされたものであり、それが Suddenly Last Summer とテーマも人物構成も類似しているとしたならば Kopit は Robert Brustein のように何ら独創性をもたないで、ただ前衛劇の技法のみをまねる作家に過ぎないのだろうか。Kopit の劇に観客にショックを与える劇的技法以外に現代的意義はないのだろうか。

ここで Williams の Suddenly Last Summer と Kopit の Oh, Dad とをもう一度比較してみたい。Suddenly の父親 Mr. Venable にしても Oh, Dad の父親にしても、既に死んだものとして舞台にはでてこない。共にその妻に支配されていた弱い夫であったことは想像できる。だが Williams の劇の Mrs. Venable と Kopit の劇の Madame Rosepettle とでは夫に対するかわり方が大変違っている。Mrs. Venable は病気の夫を家において息子と旅に出ている。そして夫から、“Mr. Venable critically ill. Wants you. Needs you. Immediate return advised most strongly.”¹⁰⁾と即刻帰国を要請する電報がきても、無視して旅をつづけたのである。が Madame Rosepettle は夫を一見ないがしろにしたり、結果として死に追いやりたりしているが、それは夫を完全に理解し全く自分のものにしたいという欲望から生れているのである。Williams の劇の場合、夫との関係があまりにも淡々と描かれる場合が多く、The Glass Menagerie の場合などでも long distance に恋をし、家を出てメキシコの小さな町から“Hello—Good-by”と住所を記さない葉書を送ってきただけで消息をたてしまった夫に対して Amada が大して執着を示さないのは、Suddenly の Mrs. Venable の夫に対する態度と同じく、夫婦の心の交流という点は重

視していないように思える。総じて Williams の場合 *The Streetcar Named Desire* の Stanley と Stella 夫婦の場合のように、動物的とも思える肉体的な結び合いを通じてのみ夫婦の絆はあるとし、心の交流には重きをおいていない。Kopit の場合 *Madame Rosepettle* は、夫の肉体があまりにも簡単に満たされ喜ぶのに不満を感じ、あらゆる方法で夫を理解しようと努めるのだった。夫と他の女性の姦通すら、夫の心の真の姿を知るための手段であった。Albee の *Who's Afraid of Martha* と George が危険な情事遊びを通じても互いの心の底に達したいとあがく姿と似通っている。この点に Williams と次の世代 Albee, Kopit などの不条理派の作家とが一線を劃するところがある。不条理派の作家、あるいは、六〇年代の作家が追い求めるのは、倫理とか形式とかをこえても、相手の心の底に達することである。人間同志が理解し相手を本当に自己のものにすることが不可能な社会的環境のもとに、いかにそれを可能にするかにその課題があるのだ。これは Williams と Kopit の劇の各々の母子関係にもあらわれている。*Suddenly Last Summer* の Mrs. Venable は息子 Sebastian の崇拝者である。一年に一作「夏の詩」を書く Sebastian の詩人としての人生をまっとうさせるための召し使いといってもいいかも知れない。母親は「私がない限り、息子は詩作さえも出来ない。私がある場にいなかったから昨年の夏、突然に息子に死が襲ったのだ。」*“Without me, impossible, he wrote no poem last summer. . . . Without me he died last summer.”*¹¹⁾ と話し、又自分のみが Sebastian の全ての要求を満たしうるのだと思っている。*“I was actually the only one in his life that satisfied the demands he made of people.”*¹²⁾ と母親は信じているが、息子は母親を利用していたに過ぎない。彼の同性愛の対象となる男性をおびき寄せる餌だったのだ。だから母親が軽い卒中で美しさをなくしてしまうと、従妹の Catharine をつれて旅に出たのだった。母親はそれを理解出来ない。彼女はなお詩人の保護者としての自分の役割を信じている。*“A poet's vocation is something that rests on something as thin and fine as the web of a spider. . . . That's all that holds him over!—out of destruction. . . . Few, very few are able to do it alone. Great help is needed. I did give it! She (Catharine) didn't. . . . We had an agreement between us which he broke last summer when he broke away from me and took her with him, not me.”*¹³⁾ と全ては Catharine があらわれ、真の保護者である母親を除外したところに Sebastian の死の原因があると主張するのであるが、しかしそれ以前に母と子のつながりは切れていたのだった。Catharine の言葉を借りるならば *“Something broken, that string of pearls that old mothers hold their sons by like a—sort of—umbilical cord, long—after. . . .”*¹⁴⁾ と両者の間の臍帯はすでに切れていたのであった。Mrs. Venable の息子に対する態度には無意識的にはあっても、incestuous なものがある。これは Mrs. Venable の言葉の端々にも伺われる。例えば *“We were a famous couple. People didn't speak of Sebastian and his mother or Mrs Venable and her son, they said, 'Sebastian and Violet. . . .’”*¹⁵⁾ という Mrs. Venable の感情は明らかに母と子との関係をこえているし、第三者の目にもそのように写っていた。彼女は息子が chaste であることを尊重し、それを誇りとしてい

るが Nancy M. Tischler が “The emphasis on chastity and asceticism, unfortunately, works for a more distorted physicality than normality would have demanded: It has made her unconsciously incestuous. . .”¹⁶⁾ といっているように、彼女の息子に対する異常な気持のあらわれといっても良いだろう。Suddenly Last Summer にあらわれた母と子の関係は母が夫に満されぬ気持を息子にかけ incestuous な愛情すらもち、息子を偶像化し、それに仕える侍女としての役割を果そうとするが、その役割を行うことが出来なくなると、息子は自分のもとを去ってしまうという弱者の立場に立たされている。しかし、母親には息子を信じる幻想がある。この母親は、親子関係も Catharine が “We all use each other and that’s what we think of as love, not being able to use each other is what’s—hate.”¹⁷⁾ というように利用し合いの関係であることを認識せずに、母親の立場から盲目的に息子につくことが息子の心を満たし、それで親子関係の靱帯が保ちうるという幻想にしがみついているのである。

Kopit の劇の母親 Madame Rosepettle は息子 を全く自分のものとして、自分の意のままに扱ってきたのである。彼女がはからずも crib を cage と云いあやまったように、息子 Jonathan はおりに入った彼女の愛玩動物であり、己が思うままに育ててきたのであった。Jonathan は Albee などの描く「想像上の子供」のように全く母親に服従し、自由に操られていた。他の人と雄弁に話し合える Jonathan が、母親の前ではひどい吃音であることが彼の母親を恐れる気持を明確にあらわしている。Jonathan も Suddenly の Sebastian と同じように、年令の進むのを止める努力をしている。Sebastian の場合は自分の美しいもの若いものを求める趣味のために、自分にも課し、母親にも求めたものであった。

Mrs. Venable の言によれば “He (Sebastian) was a snob about personal charm in people, he insisted upon good looks in people around him. . . he had a perfect little court of young and beautiful around him always, wherever he was. . . . It takes character to refuse to grow old,—successfully to refuse to. It calls for discipline, abstention. One cocktail before dinner, not two, . . .”¹⁸⁾ Mrs. Venable は若さを保つのを失敗したのであるが、息子の死後にも五時に時間を決めて冷した daiquiri カクテルを飲むのも息子とともに自らに課した修練のなごりであろう。

Kopit の劇の場合 Jonathan は17才になっても10才の子供の服装を強いられている。部屋の中に閉じこめ、切手と貨幣と本のみを与え、Jonathanを子供の世界に止めておくことで Madame Rosepettle は息子に対する支配慾をさまたげられることなく発揮できるだろう。彼女はこれを cannibalism の外界から Jonathan を守るための最良の方法であるとも思っている。Madame Rosepettle には Mrs. Venable のように子供に対する崇拜の念はない。自分の夫をあくまで絶対的に自分のものに（心も肉体も）しようとしたが果せず、全く自分のものになった夫は、もはや死体であった。それでも彼女はその死体を大切にもち歩き、旅にも持っていった。それは「自分のもの」だからである、だが生きている「自分のもの」が欲しい。それを Jonathan に求めた。

彼女は息子を Albert と夫の名で呼んだ。そして、あらゆるこの世の汚れ、誘惑から守ろうとした。そのためには Jonathan を子供の世界に閉じ込めておく必要があったのだ。Madame Rosepettle は一夜の宴に招いた船長 Roseabove に次のように説明している。

“... my son is mine. His skin is the color of fresh snow, his voice is like the music of angels, and his mind is pure, ... it is I who have saved him. Saved him from the world beyond that door. The world of you. The world of his father. A world waiting to devour those who trust in it, those who love. A world vicious under the hypocrisy of kindness, ruthless under the falseness of a smile. Well, go on, Mr. Roseabove. Leave my room and enter your world again—your sex-driven, dirt-washed waste of cannibals eating each other up while they pretend they're kissing.”¹⁹⁾

Madame Rosepettle はこの虚偽の世界、偽善の仮面の下に憎しみ合い相手をおとしめようとする世界から息子を救っているのだと述べている。しかし息子はいつまでも、子供の世界に満足していなかった。部屋に閉じこめられていても、母親の目を盗んで、望遠鏡で近所の女性を観察するなど、反抗の萌芽をみせていたが、母親と Mr. Roseabove の話を立聞してからは明らかに異なる行動に出て、はえ地獄と闘い、これを倒し、ピラニアをも殺し cannibalism 世界でも生き抜く意志と力があることを象徴的に示すと共に、母親への反抗の態度を始めてとったのだった。

Jonathan はたまたまホテルへしのできた少女 Rosalie に不満をもらすのだった。“She... she hates me. She doesn't let me do anything. She doesn't let me listen to the radio. She took the tube out of the television set. She doesn't let me use her phone. She makes me show her all my letters before I seal them.”²⁰⁾ 母親は Jonathan が日やけするといけないうって日中には窓際に立たさないし、夜は風が冷た過ぎはしないかと心配し、そして誰も読んだこともないような本を何回も読ませると過保護の不満をぶちまけるのであるが、Jonathan を本当に反抗にかりたてたのは、毎日“I love you.”とくり返している母親の全ての行為は、愛の行為ではなくて、母親の女としての利己的な所有慾からであることを知ったことだった。その強烈な所有慾のために父をも死に追いやった母親が自分をも餌食にしようとしていることを知ったことだった。夫婦相互の理解が不可能であり、相手を「自分のもの」に出来ないという悩みを、子供を自分の思いのままにすることで解決しようとする欲望は現代人の間では強いものであることは前号の拙稿において例証したところであるが、Kopit の劇の Madame Rosepettle の夫、息子に対する行動は、この現代人の願望を誇張したかたちで表現しているのであり、また終幕における Jonathan の反抗は、その解決を子供に託することの夢に過ぎないことを表しているとすれば、現代人はやはり子供を「想像」する以外に自らを慰める方法がないことが明らかになる。

Suddenly Last Summer と Oh, Dad の二つの劇を比較して、親の立場、即ち Mrs. Venable と Madame Rosepettle の立場から考えると、Williams と Kopit には問題をとらえる意識において世代差ともいえるべき相違があることは明らかになったが、次に子供の立場から考えてみよう。

親の愛玩物になることを拒否し、母に反抗した Jonathan は独占慾の強い女性から開放されたわけではない。親の過保護のもとに自己の意志も個性も抹殺されていた子供に、いずれの時に *initiation* が訪れ、親の世界に反抗して去っていくのは当然のことであるが、次にどのような世界がまっているのだろうか。Kopit の劇では次に Jonathan を待つ世界は少女 Rosalie によって象徴されている *sex* の世界であった。それはロレンス流に言えば、女性によってむさぼり喰われる *cannibalism* の世界だ。その世界でも女性 は母親と同じく彼の全てを求めてやまない。ここも強烈的な女性の *ego* の世界である。Rosalie は子供じみてはいるがしかしコケティッシュな様子で、Jonathan を誘惑する。そして彼を母親の寝室へと誘う。Jonathan は許されていない母親の寝室へ入ることを恐れ拒否するが、Rosalie の強引さに負けてこわごわ母のベッドに近づく。Rosalie は衣服を脱ぎ捨て彼を誘うが、その時押入れが開き父の死体が落ちて来て邪魔をする。だが Rosalie はなお執拗に彼を求める。

“Forget about your father. Drop your pants on top of him, then you won’t see his face. Forget about your mother. She’s gone. Forget them both and look at me. Love is so beautiful, Jonathan. Come and let me love you; tonight and forever. Come and let me keep you mine. Mine to love when I want, mine to kiss when I want, mine to have when I want, Mine. All mine.”²¹⁾

両親の世界を完全に脱却して自分のものになるように求めるのだが Jonathan は突然 Rosalie を窒息死させ、その上に切手、貨幣、本などをかぶせ埋めてしまう。彼をとらえる父親の手をふりほどいて天上からの楽の音と共に夢遊病のように、バルコニーに出て望遠鏡で空を仰ぐ。母親が帰ってきて自分の部屋に少女の死体と切手と貨幣の山を見て驚き、“As a mother to a son, I ask you. What is the meaning of this?”²²⁾ と聞くところで幕となる。

Suddenly Last Summer の Sebastian が母親に代る旅の同行者として選んだ Catharine は、妻のある男性に犯され、その心理的な傷のために自己を否定し、第三人称でしか日記をつけられなくなった女性である。Sebastian が彼女に求めたものは *sex* をともなった愛ではなく、母親が崇拜者として彼につくしたのと同じ奉仕であった。それが独占慾をともなった愛となるとき、Sebastian は Catharine との関係に安んじることができなくなるのだ。Catharine は自分のこの点についての誤解を次のように説明する。

“I made the mistake of responding too much to his kindness, of taking hold of his hand before he’d take hold of mine, of holding on to his arm and leaning on his shoulder, of appreciating his kindness more than he wanted me to, and suddenly last summer, he began to be restless...”²³⁾

Sebastian は女性の独占慾のともなった愛を拒否したのであった。彼は本能的に女性の *sex* をともなった愛の恐ろしさを知っていたのかも知れない。Sebastian は積極的に「輝く太陽を喰いつくす闇」(the harlot of darkness who tries to devour the bright male sun) と戦うのではな

く、避けて母性的な保護のみを女性に求めたのであった。母の代りに選んだ sex を否定している筈の Catharine も女性的な愛を示すようになると Sebastian の心の安定はくずれ、詩作の能力を失い破滅が訪れるのは必然的なものになってくる。Sebastian が服を破られ、肉をむしられて死ぬのは、現代における男と女の性の戦いにおける cannibalism の象徴的な表現とも考えられるのである。

Jonathan は Rosalie を殺すことによって、彼女によって象徴される sex の世界を否定したが、次に何を期待することができるのだろうか。Sebastian のように同性愛の世界に逃れることも、又 cannibalism の餌食となって死んでしまうことも Jonathan の場合は考えられないだろう。母親の愛玩物的存在からも、女性の独占的愛情からも一応は脱出した Jonathan ではあるがこの二つを否定して生きていけるのだろうか。Saul Bellow の小説 Herzog は主人公が、女性の愛情を必要としながらも、それを拒否して人里離れた森の中の家に一人住む所で終っているが、その主人公が次に何をたよって生きるかは Saul Bellow は語っていない。Williams のように死に帰結を求めることは60年代の作家には、安易な白々しい手段にみえて出来ないのかも知れない。希望もなく充足されることもなく、次にくるものを待つことこれが現代人の宿命かも知れない。Jonathan は母親からも Rosalie からも脱出したといったが、明確な意志をもってしたわけではなく、全て発作的な行動である。Sebastian の行動はある程度計算があり目的があった。そして彼は「神」を求めての旅を続けていた。それを失ったが故に、精神の安定をくずし、自らを死に追いやったとも考えられる。Jonathan には、もともと人生の目的も、希望も殆んどなかった。そして突然訪れた一種の initiation に彼は目覚めて突発的な行動をとったのであった。彼の心を安定させるのは母親の保護の下にもどることか cannibalism の世界で戦うことか、又他に本能と精神を安定させる方法があるのか Jonathan 自体にもわかるはずがない。もともと失うべきもののない世代が心の支柱を求め、それが求められぬままにさまよるのが現代人の姿だとしたら Jonathan はその典型だろう。不条理 Absurd という語を Ionesco は “Absurd is that which is devoid of purpose. . . all his actions become senseless, absurd, useless.”²⁴⁾ といっているが、Jonathan の姿はまさしくその定義にあてはまるだろう。Kopit は Beckett などの不条理劇をあこがれて、この劇を書いたのかも知れないがその作品の中に現代アメリカ人の苦悩が描かれ、独自の世界を作っているのである。不条理劇の時代となるだろうと予想されて始まったこの60年代も終りに近づき不条理劇も（アメリカでは）さして根をおろさないでしまった感があるが、私は Albee などよりもむしろ Kopit に不条理劇の先駆としての夢をかけていたのである。批評家達は Kopit は技法的な面では、この Oh, Dad にしても1965年にオフ・ブロードウェイで上演された The Day the Whores Come Out to Play Tennis においても、その奇抜さは人を驚すに充分であったが、その奇抜な技法がテーマによる内面的必然性を伴っているかどうかを疑問視していた。例えば Allan Lewis は Oh, Dad を “A college boy hoax on the present trend of being anti-woman, anti-sex, and anti-life.”²⁵⁾ とかたづけてしまっ

いた。私は Williams などとの 相違を考察し Kopit の劇のテーマの現代的意義を解明し、それが60年代の幕開けの作品として価値あることを立論したつもりである。

過ぎ去らんとする60年代のアメリカ演劇界の動向を振り返ってみたいと願う私の研究計画の出発点としてこの小論を草する次第である。

註

- 1) Gaynor F. Bradish 前ニューヨーク大学教授の講義ノートによる。
- 2) Lee Baxandall, "The Theatre of Edward Albee," (Tulane Drama Review, Vol. 9, No. 4, Summer 1965)
- 3) Robert Brustein, *Seasons of Discontent*, (London, 1966), p.63.
- 4) Martin Esslin, *The Theatre of the Absurd*, (Garden City, N. Y., 1961), p.228.
- 5) Arthur Kopit, *Oh Dad, Poor Dad, Mamma's Hung You in the Closet and I'm Feelin' So Sad*, (New York, 1966), p. 67.
- 6) Kopit, p. 67.
- 7) Kopit, p. 67.
- 8) Kopit, p. 69.
- 9) Kopit, p. 71.
- 10) Tennessee Williams, *Suddenly Last Summer*, (Harmondsworth, Middlesex 1959), p. 120.
- 11) Williams, p. 116.
- 12) Williams, p. 149.
- 13) Williams, p. 149.
- 14) Williams, p. 150.
- 15) Williams, p. 123.
- 16) Nancy M. Tischler, *Tennessee Williams: Rebellious Puritan*, (New York, 1965), p. 260.
- 17) Williams, p. 142.
- 18) Williams, p. 121.
- 19) Kopit, p. 72.
- 20) Kopit, p. 75.
- 21) Kopit, p. 87.
- 22) Kopit, p. 89.
- 23) Williams, p. 148.
- 24) Esslin, p. 19.
- 25) Allan Lewis, *American Plays and Playwrights of the Contemporary Theatre*, (New York, 1965) p.201.